

聖書:第一列王記15章1～24節

説教:エルサレムに一つのともしびを与える

はじめに

神が約束の地として与えてくださったイスラエルはダビデの手によって統一され、彼の子であるソロモンが跡を継ぎ、イスラエルの最も経済的に栄えた時代を迎えます。ところがソロモンが亡くなった途端にそれまで抱えていたいろいろな不満が吹き出し、結局イスラエルは北と南に分裂して憎み合う関係となってしまいます。

前回は、南王国ユダの王となったレハブアムに目を留め、聖書に「異邦の民の、すべての忌み嫌うべき習わしをまねて行っていた」と書かれるほど信仰が乱れていったことを見ました。モーセを通してイスラエルの民は偶像を拜んではならないと厳しく言われていたのに、なぜこうも簡単に異教の神々に走って行くのかと不思議に思うかもしれません。でもこれは他人事ではない。私たちだっていつ同じようなことをするのかわからない。大丈夫だととても言えません。そんな私たちが神ほどのようにされるのか。普通なら、あきれてさじを投げてしまうか、堪忍袋の緒が切れて怒りにまかせて滅ぼしておしまいでしょ。ところが神は諦めません。とことんどこまでも、どうしようもないイスラエルと付き合っていく。その付き合い方とはどのようなものであったのか。今日の所から見えてまいります。

1 アビヤム

1) 罪のうちを歩む

南王国のレハブアムが亡くなった後、王となったアビヤムが何をしたのかについては3節にまとめられています。「彼は、かつて自分の父が行ったあらゆる罪のうちを歩み、彼の心は父祖ダビデの心のように、彼の神、主と一つにはなっていなかった。」

ひとこと言えば、父であるレハブアムに続いてその子アビヤムも罪のうちを歩んだと言っているのですが、ここで「彼の心は父祖ダビデの心のように、彼の神、主と一つにはなっていなかった」と、わざわざダビデの信仰と比べられているところに注意していただきたいと思います。そのダビデの信仰については、5節にまとめられています。「それは、ダビデが主の目にかなうことを行い、ヒッタイト人ウリヤのことのほかは、一生の間、主が命じられたすべてのことからそれなかったからである。」

2) ダビデの信仰

ダビデが主の目にかなうほどのすばらしい信仰者であって、人々の模範となる人物であった。それでダビデの信仰と比べられているようにも思います。であれば、「ヒッタイト人ウリヤのことのほかは」と書くのはどうしてでしょう。ご存じのように、ウリヤはダビデの優秀な部下であり、バテ・シェバの夫でもあったわけですが、ある夕暮れ時にダビデが屋上に上って外を眺めていたとき、たまたまバテ・シェバが水浴びをしているのを見てしまったことから、彼は王としての地位を利用して強引にバテ・シェバを自分の妻としてしまいます。このことがウリヤに知られるのを恐れたダビデは、ウリヤを戦争の最前線に送って合法的に殺してしまう。おまけに預言者ナタンから責められるまで、何事もなかったかのように自分の罪を隠していた。そのことを言っています。これは栄えあるイスラエルの王の経歴を汚す、まことに都合の悪い真実です。ところが聖書はそんなことお構いなしに、ずばり「ヒッタイト人ウリヤのほかは」と但し書きをする。不思議です。

3) ダビデに免じて

もう一つ不思議なのは4節です。「しかし、ダビデに免じて、彼の神、主は、彼のためにエルサレムに一つのともしびを与えて、彼の跡を継ぐ子を起し、エルサレムを堅く立てられた。」

アビヤムは父と同じように偶像を拜み、イスラエルの神を捨てるような不信仰なことをしたにもかかわらず、「ダビデに免じて」彼の跡を継ぐ子を起こした、と言っています。

家の跡を継ぐ者が与えられるかどうか、日本ではお家の一大事と言われるほど大変な問題でした。例えば私の叔父の話なのですが、叔父はまったく縁がない方から頼まれて跡継ぎがないので形だけでよいから婿養子になって欲しいとお願いされてその家の姓を継いだと言っていました。そうしてでもとにかく家の名が消えないようにする。

事情はイスラエルでも同じで、家の名前が途絶えることは神の祝福を失うのと同じと考えられていた。アビヤムはひどい罪を犯していたのですから、本来なら神の祝福を失って跡を継ぐ子が与えられなくてもおかしくありません。にもかかわらず、彼の

跡を継ぐ子が与えられた。その理由は「ダビデの免じて」とあって、ダビデの信仰のおかげだった。

いったいこれはどういうことか。そのことを考える前に、まずアビヤムの跡を継いだアサ王のことを見ておきます。

2 アサ

1) 主の目にかなうことを行ったが

アサの信仰については11節にあります。「アサは父祖ダビデのように、主の目にかなうことを行った。」

具体的には、国の中のあちこちに置かれていた偶像を壊してゴミ捨て場で焼いたばかりではなく、偶像を拜んでいた母マアカを皇太后の位から退ける。自分の身内にまで手を伸ばして人事を行うのですから、これはかなり強い決意がないとできない。確かに彼はすばらしい信仰者だったのかなと思う。

2) アラムの王と同盟を結ぶ

ところが物事はそんなに単純ではない。常々北王国と南王国の間には国境線のあたりでいつも軍事的な小競り合いがあったのですが、あるときそれがエスカレートしてきます。エルサレムから目と鼻の先にあったラマという町へ北王国イスラエルの王であったバアシャが要塞を築いてエルサレムに入る道を塞いでしまいます。さすがにこれは黙って見ているわけにはいかない。それでアサはなにをしたか。アラムの王さまに貢ぎ物を差し出して軍事同盟を結ぶことでした。アラムは北王国イスラエルのさらに北に位置しています。アラムが北の国境線から北王国イスラエルに侵入すれば北王国はそちらに軍隊を送らなければなりません。そうなればラマの防備は手薄になって取り返すことができる。この作戦は見事に成功してラマを取り戻すことができました。

3) 「あなたは愚かなことをした」(第二歴代誌16章7節)

これだけ見れば、アサは政治的に優れた王さまとして評価されることでしょう。ところが並行箇所第二歴代誌16章7節以降を見ると全く正反対の評価となっている。予見者ハナニがアサのところに来てこう言うのです。「あなたはアラムの王により頼み、あなたの神、主により頼みませんでした。」「あなたは、このことについて愚かなことをしました。」あれだけ熱心に国の中から異教を取り除こうとしたアサが、肝心なときに主に

より頼まなかった。確かに言われるとおり。アサは悔い改めるべきでした。ところが彼はそうしない。かえって怒りにまかせてハナニを牢に閉じ込めてしまう。どうも信仰者としてはかなり問題を抱えていたようなのです。

3 一つのともしびとはだれのことか

1) アサ?

ここで先ほどわきに置いておいたままにしていた問題に戻しましょう。アビヤム王は罪の道を行っていたのにもかかわらず、ダビデに免じて、彼のためにエルサレムに一つのともしびを与えたと4節に書かれていました。では、一つのともしびとはだれのことであったのか。世継ぎが与えられることが最も大切なことだと考えられていた時代でしたから、これはアサのことなのか。確かに彼は、「父祖ダビデのように、主の目にかなうことを行った」と書かれている。具体的には、国の中に蔓延していた偶像を壊し、皇太后マアカを退けた。それはすばらしい業績でした。でも、いま見たとおり彼はいつもすばらしい信仰者であったのではない。軍事的な緊張が高まったとき、彼は主により頼まずに人の力、軍事力に頼って危機を乗り越えようとなりました。予見者ハナニが罪を指摘しても悔い改めようとしません。これは信仰者として大きな問題がある。それでも「一つのともしび」と言えるのか。それだけではない4節には、「エルサレムを堅く立てられた」とある。でも実際は、アラムとの軍事同盟をきっかけとして、結局南王国は弱体化の道をたどり、結局滅ぼされていく。とても堅く立てたとは言えません。こうして見るとアサのことではなさそうです。ではだれのことか。

2) ダビデに語られた主の約束

ヒントは「ダビデに免じて」というひとことにあります。これは、「ダビデがすばらしい信仰者だったので」という意味かもしれませんが、それがすべてではない。もう一つの意味があると考えられます。彼はウリヤのことでひどい罪を犯したのです。それでも「ダビデに免じて」とはどういうことか。主はダビデがバテ・シェバ事件を起こす前にこのように語っていました。第二サムエル記7章12、13節。「あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」

あなたの身から出る世継ぎのことはだれなのか。目で見る限りソロモンのことのように見えた。でもイスラエルは二つに分裂し、このあと滅んでいきます。「とこしえに堅く立つ」どころではない。ソロモンは失格です。同じようにアサも失格です。そうすると、結論は一つしかありません。ダビデの子孫として私たちのところに來られたイエス・キリストのことを指すと考えればすべて辻褃が合います。主イエスこそ「エルサレムに一つのともしびをともし」方ということになり、この方が、エルサレムを堅く立てるのだと改めて約束して下さったことになる。

3) 主の約束は絶対に変わらない

そうしますと4節は、主イエスがダビデの子孫として來られることをもう一度確認する意味で書かれていることになる。それはどんな状況で再確認したのか。アビヤムの心が神である主と一つになっただけでなかったときです。主にそむいていたときです。もっと言うならば、神がダビデに救い主をダビデの子孫として起こすとの約束をしたのはいつであったか。バテ・シェバ事件を起こす前です。その後でダビデがあれほどひどい罪を犯したので、あの約束はなかったことにしますとは言われなかった。アビヤムがあれほどひどい罪を犯していたのにもかかわらず、それでも「ダビデに免じて」と言われる。これはどういうことか。

主が一度約束して下さったことは、絶対に変わらない。たとえ私たちがどんなにひどい罪を犯したとしても主の約束が変更されることは絶対にならない。それを意味している。どうしてこのような断言ができるのか。イスラエルは何度も主の律法に違反し、神を捨てました。その結果国を失ってしまう。それでも主はダビデに語った約束を果たし、二千年前に主イエスが來られたのではないですか。

そうは言われてもにわかには信じがたい。というのは私たちは小さな時から教えられてきたのです。やるべきことを守らなかったら罰が与えられる、ご褒美を取り上げられる。そのように教えられてきた。だから一生懸命努力して上に這い上がれ。それがこの世界の掟なのだ。とたたき込まれてきた。一度でも失敗したらあとはない。一度でも罪を犯せば、人に後ろ指を指されながら生きていくしかない。どんなに後で悔いても失ったものは絶対に取り戻せない。そこで悲しんでいる方が沢山おられます。

しかし、神はそうではない。何度失敗しても、悔いて神のもとに立ち戻ろうとする者を赦し、よく帰って來たと迎えてくださる。人は言うでしょう。「甘すぎる。」でももし神がそれほどまでに私たちを赦して下さらなかったなら、私たちは神の救いをいただくことはできなかつたはずで

す。どれほどに神が私たちを救おうと手を広げて下さっていたのか、もう一度思い起こしたいと願います。